

御嶽山

井口昭久

私の研究室の部屋から山脈が見える。かすかに御嶽山も見える筈であるが、どこにあるのか定かではない。広い濃尾平野の真ん中には北がどっちなのか分からない。

私の育った信州の伊那谷では天竜川が北から南に流れ、太陽は南アルプスから顔を出して中央アルプスの山陰に隠れていた。

視力の測定で先生に「どっちに穴が開いている？」と聞かれた小学生は「ミナミ」と答えた。どこにいても、右と左が分かるように南と北は分かった。

私は周りの山々に見張られていたような気がして幼少期を過ごした。

大学を卒業すれば必ず故郷へ帰る。先祖伝来の土地を守るために、人生の一期期は生家を離れても、きつと家族を連れて戻ってくる。と、田舎の長男である私は教えられて育った。私は高校を出ると天竜川の下方の名古屋へ出て医者になった。

母が熱を出したという電話があった。私はうろたえて母の元へ走った。中央高速道路ができたばかりの頃であった。

結婚して子供ができて、私の将来が薄ぼんやりと明らかになってきた頃であった。私は故郷へ帰らないだろうと思いはじめていた。

お盆や正月に帰省して、寂しそうな母を残

して名古屋へ帰るときは、長男の約束を果たせない自責の念に駆られて必ずうつ状態に陥った。その日、母に解熱剤を渡し、5月の終わりの新緑の中央高速道路を走って名古屋へ帰った。信州から名古屋へ向かう中央高速道路は長い下り坂である。山々の重圧を離れ、私は新緑の中を気分よく走っていて、速度違反で捕まった。

若いお巡りさんに「患者が待っているので急いでいました」と嘘を言った。山の見張りがなくなると嘘をついてしまう。しかし「そういう急いでいる時はパトカーが先導します」と、交通違反切符を持たされて、裁判所へ出頭する羽目になった。

母はそれから数年後、私がニューヨークにいるときにあっけなく死んでしまった。

もう30年も前のことである。

今の大学の近くに小高い丘がある。3000メートルの丘で、中腹には緑の森の中に裕福そうな家が建っている。おとぎの国のような

その丘に、いつかは登ってみたいと思っていた。最近、ゼミの学生たちと昼飯を食べた。彼女たちとの会話で、今でも「長男は家を継ぎ、長男の嫁は長男の親の介護をするものだ」と、教え込まれていることが分かった。

昼食後に学生を連れて丘に登った。登ってみると、丘の上には山岳信仰の神社があり、「御嶽山」が祭られていることを知った。白い旗が春の風になびき、無数のお地蔵様が並んでいた。

母が死に、駒ヶ岳の呪縛からも逃れたと思っていたが、御嶽山の分身が近くで私を見張っているようであった。

(愛知淑徳大学教授・名古屋大学名誉教授)

